9　　羽根という所　　　　　　　　　　　　　　　係り結びの法則

人みなまだ寝たれば、海のありやうもア（見ゆ）ず。ただ、月をイ（見る）てぞ、西東をば知りける。かかる間に、みな夜明けて、手洗ひ、例のことどもウ（す）て、昼になりぬ。今し、羽根といふ所に来ぬ。稚き童、この所の名を聞きて、「羽根といふ所は、鳥の羽のやうにやある」と言ふ。Ａまだ幼き童の、人々笑ふ時に、ありける女童なむ、この歌を詠める。

　まことにて名に聞く所羽ならば飛ぶがごとくに都へもがな

とぞ言へる。男も女も、「いかで疾く京へもがな」と思ふ心エ（あり）ば、この歌Ｂよしとにはあらねど、「げに」と思ひて、人々オ（忘る）ず。この、羽根といふ所問ふ童のついでにぞ、また昔へ人を思ひ出でて、いづれの時にかカ（忘る）。

【本文チェック】

①（　）ア～カの中の動詞を、正しく活用させて書きなさい。

　ア（　　　　　　）　　イ（　　　　　　）　　ウ（　　　　　　）

　エ（　　　　　　）　　オ（　　　　　　）　　カ（　　　　　　）

②□Ａ・Ｂの語の品詞を書きなさい。

　Ａ（　　　　　詞）　　Ｂ（　　　　　詞）

③傍線部の右の（　）に適当な語句を入れ、現代語訳を完成させなさい。

　言葉である（　　　　　　）

【語彙力 ✚】

問１　次の語句の読みを、現代仮名遣いで答えよ。

１　西東〔１〕（　　　　　　　　　　　　）

２　童〔３〕（　　　　　　　　）

３　疾し〔７〕（　　　　　　し）

４　昔へ人〔９〕（　　　　　　　　　　　）

問２　次の語句の意味について、空欄を埋めよ。

１　かかり〔２〕　　　　（　　　　　　　　　　　）

２　ありける（連語）〔４〕（　　　　　　　　　　　）

３　～もがな〔６〕　　　（　　　　　　　　　　　）

問３　次の傍線部の意味として最も適当なものを選べ。

１　中将こそ、参りたまふなれ。例の御にほひ、いとしるく。

（堤中納言物語）

　ア　いつもの　　　　イ　評判の

　ウ　例えて言うと　　エ　相当な

　（　　　）

２　船とく漕げ。（土佐日記）

　ア　ときどき　　イ　ゆっくり

　ウ　注意深く　　エ　早く

　（　　　）

３　かぐや姫、きと影になりぬ。はかなくしとして、げにただ人にはあらざりけりと思して、（竹取物語）

　ア　とうてい　　イ　なんとまあ

　ウ　全く　　　　エ　なるほど

　（　　　）

【文法力 ✚】

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| こそ | か | や | なむ | ぞ | 係助詞 |
| 形 | 形 | 形 | 形 | 形 | 結び |
|  | ・ | ・ |  |  | 文法的意味 |

問４　次の活用表の空欄を埋めよ。

問５　次の傍線部の係助詞の結びの語を一単語で抜き出し、その活用形を答えよ。

１　やある。貸し給へ。（徒然草）

　　　結び（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

２　の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。（徒然草）

　　　結び（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

３　その人、かたちよりは心なむまさりたりける。（伊勢物語）

　　　結び（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

【古典常識】

問６　日本文学史上で日記文学といえば、主に平安時代から鎌倉時代にかけての、女手といわれた平仮名で書かれたものを指す。その最初の作品は、紀貫之が女性に仮託して書いた『土佐日記』である。特に平安時代には、『紫式部日記』のように宮廷に仕えた女房によるものなどの、女流日記が多く見られる。最初の女流日記を次から一つ選べ。

ア　日記　　イ　日記　　ウ　日記

　（　　　）

【解答】

【本文チェック】

①　ア＝見え　イ＝見　ウ＝し　エ＝あれ　オ＝忘れ　カ＝忘るる

②　Ａ＝副　Ｂ＝形容

③　ので

問１　１＝にしひんがし　２＝わらわ

　　　３＝と　　　　　　４＝いにしえびと

問２　１＝このようである・こうしている　２＝先ほどの　３＝～たい

問３　１＝ア　２＝エ　３＝エ

問４　ぞ＝連体・強意　　　　なむ＝連体・強意

　　　や＝連体・疑問／反語　か＝連体・疑問／反語

　　　こそ＝已然・強意

問５　１＝ある・連体形　２＝あはれなれ・已然形　３＝ける・連体形

問６　ウ

【現代語訳】

問３　１　宰相中将様が、参上なさったようだ。いつもの（き物の）御においが、たいへんはっきりとする。

　　　２　船を早く漕げ。

　　　３　かぐや姫は、さっと（実体のない）影になってしまった。（帝は）頼りなく残念だとお思いになって、なるほど普通の人ではなかったのだとお思いになって、

問５　１　蓑笠があるか。貸してください。

　　　２　季節の移り変わっていくのは、（まことに）いろいろな物事につけて趣深いものである。

　　　３　その人は、容貌よりは（とりわけ）気だてがすぐれていた。